

ケアプランに生活支援の助け合い活動及び本人のいきがい活動をどう取り入れるか

提言

制度の中に住んでいる人ではない。
 地域の中に住んでいる人。
 地域での暮らしに視点を置き、
 地域の社会資源に目を向け、
 生活の立て直しを組み立てていく
 ケアプランを作ろう。
 その仕組みづくりも当事者・住民と共に！

登壇者

【進行役】	江田 佳子氏	佐々町住民福祉課／佐々町地域包括支援センター課長補佐
	岡持 利巨氏	(医) 真正会 霞ヶ関南病院地域リハビリテーション・ケアサポートセンター長
	唐木 美代子氏	居宅介護支援事業所「ケアステーション地球人」ケアマネージャー
	古海 りえ子氏	(特非) みんなの元気塾副理事長
	安本 勝博氏	津山市健康増進課・高齢介護課
	石川 裕子氏	地域密着多機能ホーム「鞆の浦・さくらホーム」主任ケアマネージャー

■ 寄せられた声から

- 安本さんの発表、参考になりました。
- ビジョンの先と足元、両方を照らしていける、そんなことを大切にしたいと思った。

議事要旨 江田 佳子氏

各分野の現場で、住民と地域としっかり向き合って取り組んでいらっしゃる5名のパネリストの方々と、個の自立支援を促す地域の可能性と魅力、そして、地域関係者と介護事業所と行政等の協働のあり方等について検討をおこなった。

ケアプランに生きがい活動を取り入れるには、本人の「したい」にこだわっていくこと。その本人の「したい」は、多様性があり、経年的に変化していくものとして捉え、本人と共に見出していくことが大切である。

介護保険サービス以外をプランに入れていくには、地域資源を知り、地域との関係性をつなげていくことにより多くの時間を要し、ケアマネージャーはケースが元気になる為に地域の生活支援や生きがいを取り入れたいと思っても、対価がないことに取り組む余裕がないのが現実である。しかし、その現実を受け止めながら、改革を起こしていかないと、地域に根ざしたその方の本当の幸せは追求できないのではないか。ケアプランに生活支援や生きがい活動を入れていく努力をしていこう、その過程において、地域を知って地域と繋がることにより、そのようなケアプランづくりがしやすい地域になっていくことを目指していきたい。

また、共助からできることとして、地域ケア会議に参加する専門職が地域ケア会議の支援に留まるのではなく、職場に戻り、ケースカンファレンス等に参加した際に、積極的にインフォーマルサービスや生きがい活動の必要性を現場に広げていこう。

行政としては、地域や介護保険サービス外の活動団体の方々が、疲弊しないように、いい距離感を保ちながら伴走していくことが大切である。がんばる人たちがモチベーションを維持できるように常にスポットライトをあてていこう。

ケアマネージャーや事業所だけですべてを支援することは難しいと自覚し、地域の人たちに助けを求め、共に考え動いていくことが大切。その地域の複雑なネットワークに目を向け巻き込まれることで、要介護者の地域での暮らしの幅が広がる。自分たちの専門の中で完結しない日々の活動が、10年後、50年後のその地域の子ども教育にも、地域独自の介護文化にも影響を与えることとなる。

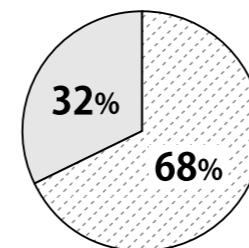
地域関係者と介護事業所と行政等が地域ケア会議や様々な連携のあり方を通じて、ビジョンを共有し協働していくことの大切さを共有した。

人を木にたとえた時、今のケアプランは土から見えているところだけを支援していないだろうか。これまでしっかりと根をおろしていたからこそ、今の人生がある、その根とは家族や友人や地域の繋がり等であり、その根をこれからもしっかりと張っていけることが、自立し、その方らしく生きがいを持って生活していくことになる。

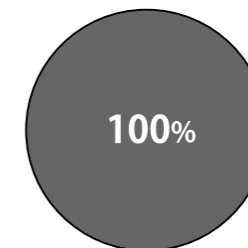
よって、ケアプランはサービスの調整という機能だけではなく、自立に向けた生活の立て直しの観点を持って、その人をトータルに見つめた視点が大切であると結論づけ、今回の提言となった。

アンケートの結果 参加者概数：80名 回答者数：74名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方

